

大川周明の『回教概論』(昭和17年)は、当時の日本にあっては画期的なイスラーム研究の達成とされる。その序文には、「いまや大東亜共栄圏内に多数の回教徒を包容するに至り、回教に関する知識は国民にとって必須のものとなった」との認識が示される。とかく大東亜共栄圏とは、東亜の盟主たらんとした日本の国粹主義が対外膨張論と結託した誇大妄想と見なされてきた。ところが、大川はイスラームによる世界征服の可能性すら見込んでいたのではないかと、後年、竹内好は述べている。大川自身には、直接そこまで踏み込んだ発言は見当たらず、竹内はいったい何を根拠に、との疑問を松本健一氏も呈している。だがこれは、竹内が大川周明に事寄せて、自らの夢想を暗に披瀝して見せたものではなかったか。『回教概論』成立期の知的環境のあらましを振り返ってみたい。

1939年6月22日、回教圏研究所所長の久保幸次による「支那回民に告ぐ」は、中国語訳により東京中央放送局からラジオ放送されている。この演説は「東亜共同体的工作」へのイスラーム教徒の参画を訴える。同じ久保は、1942年の日米開戦直後には、『回教圏』(6巻1号)に「大東亜戦争と回教圏」を発表し、回教圏

大東亜共栄圏におけるイスラームの位置づけをめぐって・上

## 大川周明『回教概論』の周辺

稲賀繁美  
国際日本文化研究センター  
総合研究大学院大学教員・

研究が、「支那」やインドネシア理解に必要なばかりか、「早晩再開されるべき西アジアとの現実的交渉」にあっても裨益するであろう、との見解を示す。大東亜共栄圏の設営にあたって、いかにイスラーム教徒の民族主義高揚を手なづけ、抗日運動からは引き離して、味方に引き入れるか、が模索されていた。

1943年11月、回教研究に関係した各種団体が集まって外務省で学術報告会が催される。大久保幸次が所長の回教圏研究所、大川周明が所長を務める東亜経済調査局・回教班、陸軍大将林銑十郎を会長とする大日本回教協会などが参加している。この席で回教圏研究所の野原四郎は、「回教徒問題について」との報告で、「回教民族」という言葉を問題にし、部族名としてではなく、民族運動の主体としての「民族」のありかたを把握することが、民族政策上必要との見解を述べている。野原の回想では、この会合で竹内好も発表したという。

(以下次号)

\*柳瀬善治「戦前期における〈回教〉をめぐる言説・研究序説」『近代文学試論』40号、2002年を参照させて頂いた。なお上に示した私見は、都立大学における研究会「大川周明のアジア主義と今日のイスラーム研究」(2005年2月28日)に於ける、筆者の発言に基づくことをお断りする。